

「全国ゲストハウスの「ひと」を伝える

「ひと本」出版」報告書

「ゆずの旅酒場（ひと本出版に寄せて）」開催報告

「ひと本出版委員会」

代表 今村 柚巴

1 活動目的

2 活動の経緯

3 「ひと本」の狙い

4 出版記念イベント概要

—データとしての満足度調査

—参加者感想（一部抜粋）

5 振り返り

—よかったところ

—反省点

6 総括した感想

概要

1 活動目的

国際交流の場としてのゲストハウスの周知を目的に「ゲストハウスを経営する人」がテーマのガイドブック(以下、ひと本とする)を作成、それにあたる広報として出版記念イベント「ゆずの旅酒場」を行う。

2 活動の経緯

私は昨年(2020/10~2021/2)、「ゲストハウスのひとを伝える『ひと本』を作る日本一周」という活動を行っていた。

昨年一年のコロナウイルスの流行が原因で国内のインバウンド率、観光する人数が減少し、旅行業界は一気に状況が悪くなっていった。もちろん簡易宿泊宿の「ゲストハウス」も同様である。

そんな中、私は自分の大好きなゲストハウスに対してできないかと考え、オンライン配信を用いて全国のゲストハウスを紹介する企画、「おうちで日本一周」を行いました。

全国47都道府県のゲストハウスオーナーとともにコラボ配信を行なっていくうち、自分でできることの狭さを感じた私は、実際にそのオーナーの元に足を運んで取材を行い、ガイドブックを執筆して出版することを決めた。

私の思いに共感してくれた世界青年の船同期と「ひと本出版委員会」を設立し、クラウドファンディング及びIYEOチャレンジファンドに挑戦することで取材主である今村柚巴が日本一周を行い、その後自主出版、送付までを行うまでの費用を集めた。

私が日本一周を行いつつも委員会のメンバーとはコンスタントに連絡を取り合い、構成から取材や本のデザイン、私が書く文章の校閲などを委託した。私は旅先、共同作成者は東京というこのご時世らしいミーティングを重ね、先日完成。まずはクラウドファンディング支援者の方への送付を終えた。

上記「ひと本」完成にあたり旅の出来事を報告しつつ、同時に「ひと本」の販促を行うという目的のために出版記念イベント開催を開催した。

3 「ひと本」の狙い

「ひと本」を手取ることをきっかけに「国際交流の場としてのゲストハウスの周知」のみならず、地域活性化と言う文脈でも社会的影響を与えることができると検討している。

国際交流という面に関しては本出版物掲載ゲストハウスはテーマが国際交流であるものも多く存在し、外国人スタッフの採用や国内留学的なイベントを開催しているゲストハウ

スも多く存在している。

今はコロナウイルスの影響で海外進出が難しい時代ではありますが、本作品内で取り上げさせていただいたゲストハウスをきっかけとして今でもできる国際交流を、そして今後国境間の移動が可能な状況になってきたら訪日観光客の多く集うゲストハウスを通して、日本国内でもできる国際交流を検討していくというきっかけになると検討している。

また地域活性化に関しまして、本作品で取り上げるゲストハウスは、昨今は対海外観光客のための宿には留まらず、地域発信のハブスポットして存在するものも多くあります。本作品を通して日本の地域に流入する若者（ターゲットは20~30代）も増やすことを狙いとしました。

4 出版記念イベント概要

基本入場は無料、日本一周した中でも今年震災から10年目ということもあり「気仙沼」をテーマに食を通じながら生産者やゲストハウスオーナーなど、旅先で出逢った人々を伝えた。

コロナウイルスの流行から東京都はまん延防止等重点措置が発令されていたこともあり、当初の予定である18時30分~21時00分から予定を変更し、17時30分~20時00分のイベントに変更した。

事前準備としてイベントで提供する食材を購入するため宮城県は気仙沼に足を運び、「ひと本」でも紹介した「ゲストハウス架け橋」に本を渡した。オーナーさん及び町の人からも好意的な感想を直々に頂戴することができた。本イベントは今後ゲストハウスの振興だけでなく、地域活性化を目的に地域紹介を行うため定期的開催をしていく予定であり、その初回として地域食材や地域情報をプレゼンテーション及び会場での対話を通して行うように心掛けた。

またイベント内では基本マスクで過ごすことを徹底し、来客者同士の距離を持って対応した。ゲストハウスそのものの利用規約として検温（37.5度以上の人は入場禁止）、アルコール消毒が設けられ、飲食をする瞬間以外は徹底した安全対策を実施した。

結果的に30の方がいらっしゃり、私の旅の報告を通して参加者同士で今後の旅先の話などをさせていただくことができた。スライドでもゲストハウスのことを紹介すると共にユーモアを交えつつ地方との交流の様子、世界青年の船事業のことも自身の転換期という意味合いを込めて紹介した。

後日、イベント参加者のスレッドを作成、イベントで紹介した気仙沼の食材の生産者や協力してくれた地域の人々を紹介した上で、イベントアンケートを作成した。

以下、その回答分布と感想の一部抜粋である。

ーデータとしての満足度調査

・運営対応の満足度

1 (低) ~ 5 (高)

1 (0%) 2 (20%) 3 (60%) 4 (0%) 5 (20%)

・フードの満足度

1 (低) ~ 5 (高)

1 (0%) 2 (0%) 3 (40%) 4 (40%) 5 (20%)

・イベント全体の満足度

1 (低) ~ 5 (高)

1 (0%) 2 (0%) 3 (40%) 4 (60%) 5 (20%)

・次回開催したら参加したいか

1 (低) ~ 5 (高)

1 (0%) 2 (0%) 3 (40%) 4 (20%) 5 (40%)

一参加者感想 (一部抜粋)

「主宰者の思い、情熱が伝わって来ました。運営スタッフの細やかな気配りにも感謝します。次回も頑張ってください。」

「率直に要望を書きます。事前の人数把握が難しいと思うんだけど、キャパオーバーの状態は時勢的に参加するのを私なら躊躇うな。。会場固定でやるなら、機会を減らすことになっちゃうけど参加者の満足度を高める為にも人数制限した方がいいんじゃないかと思います。ゆず(や運営側)もゆっくり対応、会話しやすいだろうしね。より充実した2回目になりますように！ 気仙沼のご飯美味しかった〜🍷」

「話もいいけど交流しながらだともっといい😊」

このような意見を頂戴し、委員会内でフィードバックを行いました。

5 振り返り

一よかったところ

- ・集客が成功したことで、多くの人にゲストハウスのことを知ってもらうきっかけになった
- ・全体的に満足度がやや高いことから、初回のイベントとしては手応えが感じられた。
- ・会場をゲストハウスにしたことで、ゲストハウスの宿泊客が生まれ、結果的に貢献に繋がったと言える。
- ・気仙沼の食材を実際に味わってもらうことができた。

一反省点

- ・人数制限を設けず、無償で行ったことから予想以上の参加者が集まってしまった。借用

した部屋を増やすことで密にならないように対応を行ったが、どうしてもプレゼンテーションを行うときなどは同じ場所に多くの人が集まらざるを得ない状況になってしまった。

・上記の通り、本来の想定よりも多くの人が集まったことで、イベント運営者の人数が足りず、交流という点においてはあまり時間を儲けることができなかった。自身のプレゼンテーションを聞くとき以外でも積極的にアイスブレイクを用いたりすることで参加者同士の交流を促すべきであった

反省点も多くあったが、総じて満足度も高く、イベントとしてゲストハウス及び地域振興活動として手応えのある開催となった。

今後は月に一度の開催を目指し、継続して活動を行う運びである。

6 謝辞

本イベントの開催地をゲストハウスにしたことで多くの参加者が「ゲストハウス」を初めて経験することになりました。参加者の中には新しく「ひと本」を購入する人もいたこともあり、「国際交流」「地域活性化」のきっかけとなるゲストハウスへの興味関心のきっかけとなっていていただければと考えております。

本プロジェクトを共に遂行してくれた「ひと本出版委員会」の面々及びクラウドファンディング（総額 1,351,000 円）にご協力いただいた 163 名の方々、並びに日本青年国際交流機構の皆様がこの場をお借りして感謝を申し上げます。

今村柚巴